

## 問題 1

「元気になって」と言う発言者は、自分を支援者だと誤認し、励まさなければいけないと思いつこんでいるが、その言葉は元気になりたくてもなれない病者を苦しめる。自分の発言の暴力性に発言者は気づくべきであるから。

## 問題 2

## 【解答例 1】

たいていの場合、支える者が苦しむ者に恩恵を与える、と私たちは考える。しかし、与えられるのはせいぜい水分や栄養や薬剤、身の周りの品々、また静かな時間や環境といったものである。それらがとても大切であるとしても、表面的なことに過ぎない。精神的な癒しや慰めについては、恩恵として与えようとして与えられるものではないのである。

本当は、私たちは苦しむ者の苦しみに共感することも、理解することもできない。苦しむ者の横に黙っていることは、自分の非力さを痛感させられることになり、とても苦痛である。それに耐えられないから、恩恵を与えることができていると思いたいのである。

だが、苦しむ者は、支える者との間に共感も理解も成り立たないと分かっている。支える者が非力さに苦しんでいることもくみ取っている。だから、支える者を気遣い、支える者のために生きようと欲するのである。そのような苦しむ者の姿に、支える者は魂をゆさぶられ、生きる希望を見出しもする。その意味で、苦しむ者から多く恩恵を受け取る。

看護師はプロとして患者の QOL の向上を目指す、患者から多く恩恵を与えられる存在でもある。患者は人生の先輩である。驕りを排し、まずは謙虚に横にいて、発話を傾聴

し、死に際しての人間的な成長に学ぶ姿勢が大切である。善意の先入観によって患者一般を理解したつもりにならずに、一人ひとりの生と死に寄り添う必要がある。

## 【解答例 2】

病者にせよ被災者にせよ、苦しむ者を支えようとする者は、援助の手を差し伸べ、理解や共感を示そうとするが、苦しむ者は理解も共感も不可能なことはよくわかっている、その思いをくみ取りながらも、むしろ、黙って横にいて、日々新しく協同の関係を結んでくれることを望んでいる。だが、苦しむ者はそれが支える者にとって忍耐と苦痛を伴い、自己の非力を痛感させるものであることも理解しているので、自分を支えようとする周囲の者のために苦痛に耐え、心を砕き、互いに全身をなげうって、存在の奥から何かを呼び覚まそうとする。その関係性を通じて、支える者は苦しむ者の思いや気遣いを受け止めることになる。それが、「苦しむ者は、多く与える者である。支える者は、恩恵を受ける者である」ということだろう。

大ケガで入院し、選手の道をあきらめざるをえなくなったテニス部の友人を見舞ったときのことだ。うつむいた友人の姿を目にしたとき、彼女にかけようとしていた励ましの言葉が、喉の奥へと逆流していくのを感じた私は、言葉もなく、ただそばに座るしかなかった。やがて彼女はぼつぼつと自分のケガのことや今の気持ちを語り、そして、励ましの言葉のひとつもかけられないことを詫げる私に、むしろ気遣いの言葉をかけてくれていた。苦しむ者と真摯に向き合うことは、その人の思いの深さと気遣いを改めて受け取ることなのだと思える。

## 【解答例3】

支える者は、励まし、同情し、共感しようとするが、苦しむ者は、それが不可能なことはよくわかっている。だから、黙って横にいてくれさえすればよいのだが、それが支える者にとって忍耐と苦痛を伴い、非力を痛感させるものであるということも理解している。苦しむ者はただ、日々新しく協同の関係を結び、存在の奥から何かを呼び覚ますことを望んでいる。そこで、支える者のために、苦痛に耐え、心を砕き、支える者を思いやるのである。その思いに、支える者は恩恵を受けたとを感じるのだろう。

祖母は、私が中学の時亡くなったが、お見舞いにいった際には、自分の病気のことなどそっちのけで、私の高校進学や将来のことばかり話していたことを覚えている。長い入院で不安だったろうし、苦痛もあっただろうと思うが、いつも笑顔で、私の他愛のない話を聞いてくれていた。私はその時、私が話すことで、祖母を励まし、元気付けているのだと勘違いしていたのである。

元気付けられていたのは、実は私の方だったのだ。祖母はなるべく普段と同じように振る舞うことで、祖母の病気や死について、私があれこれ思い悩まないように、気遣ってくれていたのであろう。つまり、励ましていると思っていたのだが、本当は励まされていたのである。また、肉親の死という深い悲しみとともに、病に苦しむ者、死にゆく者の魂を垣間見ることができたのではないか。